記し、その日藏經には、于闐國牛角山に瞿摩裘羅香陀大聖の住居したる傳說あり（十三于闐の牛頭山に就て參照）。本史には伏闍耶毘梨耶王は佛陀覩達の爲めに牛角山に牛頭山の伽藍を建立したることを明記せり。而して伏闍耶毘梨耶王は西紀前八三年に毘盧折那比丘の佛敎傳來の後、迦膩迦王が屈霜膩迦國王と于闐國王と共同して印度に遠征を企てたる以前の年代中に出世したるものなるに由り、牛頭山の伽藍は紀元前の建立にかゝり、牛頭山は毘盧折那比丘の于闐に來錫せし以前より靈山として既に世に知られてありしものなるべし。從て六十華嚴經の成立の當時は、既に牛角山上に牛頭山といへる山號を有せし伽藍の存在せしことを暗示す。されば六十華嚴經成立年代は紀元前一世紀卽ち第一世迦膩色迦王時代なるべしと推定し得るなり。

又八十華嚴經は于闐の實叉難陀の譯なり、その諸菩薩品には、迦濕彌羅國、乾陀羅國、疏勒、震旦の諸國名を出せり。本史にも疏勒、安息、波斯等の政治宗敎の文化的交涉を記載せるより見れば、八十華嚴經は六十よりは後代にして、于闐佛敎の隆盛となりし時代卽ち西紀一世の頭初時代の成立にして、而かもその成立地は于闐以外の西方地なるべしと推定す。又四十華嚴經は南印度烏荼國の王が梵本を献じ、罽賓三藏に依て譯出せられたり。何れにしても華嚴經は于闐國に於て成立せられたるものにあらずして、他國より傳來せられたるものなるを知る。本史に華嚴經の成立に付て何等の說話を洩らさゞるは、這般の事情を裏書きせるものとも思はる。まして起信論の如き、これ亦于闐人の實叉難陀の譯出にかゝるものなるより見れば、その原本は于闐語ではなくして梵語なりしことは言ふまでもなかるべし。

于闐に於ける大衆部と、上座部とは總計九百六十三人あり、比丘衆合計約一萬人、僧伽は計二十團、伽藍の大小合計三千六百八十八ヶ所、その內大伽藍六十八、中伽藍九十五、小伽藍十八、その餘は祠堂數なり。比丘尼の統計表は略す。げに本史の記事と西域記の記載とを比較せば本史の記述の云何に正確にして史實に近き歟を窺知し得べし。

十八　現今の于闐疏勒莎車の各事情

現今に於ける于闐及びその隣國の地理風俗物產等の各情況を古代史變遷の事情と對照して窺知することは、于闐國狀を確むるに尤も必要なる事項とす。その要求を補充すべく日野勉氏の著伊梨旅行記より抄記することゝせり。讀者之を諒せよ。

(1) 于闐國の事情

于闐は今の和闐（ホーテン）なり、東經八十度四十四分、北緯三十七度、省會に到る六百八十里、北京を距る二千餘里。城壁の高さ一丈九尺、周囲約半里、四門あり、戸數約六千、人口凡そ四萬、和闐直隸衙門あり。市街低屋稠密し、道路狹隘なれど殷盛なり。住民稍々諄朴にして、遊惰の風習少なく、稼穡に、勞働に堪へ、婦女子は養蠶、紡績に勤め、一般の生計に富む。土地は山繭に適し、野獸多く、物産は玉金・麝香・生絲・織物・敷物ありて、玉出崑崗とは此地の謂ひなり。氣候は他に比して温和なり。

(2) 疏勒國の事情

疏勒國は現今の喀什喝爾なり。東經七十六度十二分、北緯三十九度二十五分、北京を去る一千九百〇九里にあり。漢人と回民との二城あり、相隔ること約二里、漢城内に喀什喝爾道臺と疏勒府衙門あり。人戸千五百あり。回城内には喀什喝爾道臺と疏附縣あり。歐洲戰爭以前までは露清銀行支店、露國郵便局等あり。英國印度事務官駐在せり。回城は商況殷盛にして、露領土耳機斯坦、阿富汗、迦濕彌羅國等の各人種、各樣の服裝をなして蝟集往來す。

(3) 莎車國の事情

莎車國とは現今の葉爾羌（ヤルカンド）なり、葉爾とは土地、羌とは廣大の意義を有する回語なり。東經七十七

度三十二分、北緯三十八度十五分、省會を離る五百八十五里、北京を距る千九百十四里、漢城内には莎車府、協臺衙門あり、戸數約七千、繁榮の商衢をなす。漢城の高さ三丈三尺、周囲二清里餘あり。回城は街衢狹隘にして、處々溜水を湛へ、土人之を飲用す。物産は玉石最も多く、生絲・綿・麻・敷物あり、印度人蝟集し、露人亦往來す。

于闐國佛教史の研究 終

附奥史國闇于

大正十年五月三十日印刷
大正十年六月十日發行

正價金貳圓

著述者　寺本婉雅

發行兼印刷者　京都市下珠數屋町東洞院西入橘町八番戸　西村九郎右衛門

不許複製

發行元　京都市下珠數屋町
振替（東京四五九七　大阪一〇二九〇）
丁子屋書店

特約店全國各著名書林

佐々木月樵先生述

夜摩天宮會及其解說

（日本文化經典第一編華嚴經）

四六判洋裝
正價金一圓五十錢
送料金八錢

華嚴經は佛教唯一の文化經典也。そのうち、「眞」と「美」との表現は、「夜摩天會」の一篇に究まる。舞臺は「行」の審判者たる閻摩王國、寶壯嚴殿上、主人公と他方の人々との會話に自然と道德と宗教との調和を表示し、最後に人間死後有無の大問題を提起す。場々展開し行く所の「行」の描寫は「智」と「信」と相擊ち相亂れて、そこに釋尊の「昇天」と共に何人も調高き「十林」の歌をきゝ、絢爛、目を奪ふが如き「華聚」の繪卷に接しつゝ最後にすべてを「無盡」の「行」に解決するあるを見る。著者は斯界の權威華嚴經全部の內容は勿論、その絢爛と芳醇とを巧みに本會解說の上に縮寫して以て第一義諦の天地を開顯せり。敢て宗教者、思想家、藝術家の一讀を薦む。

大谷大學教授佐々木月樵先生著

華嚴聖歌

（日本文化經典第二編華嚴經）

四六版洋本
正價金二圓
送料金八錢

華嚴經は釋尊が成道の時、內に燃えし不滅の靈火である。龍樹は之を龍宮に體驗して大乘佛教の始祖となり、賢首はまた之に基きて無盡の哲學を構成した。而して近く我奈良朝文化の精髓は正しくその藝術的表現にして親鸞や明慧の鎌倉佛教の大革命も亦此經典の點火にかゝる。今や佛典中長篇難解の本聖典は茲に編者の苦心によりて各聖歌は原形そのまゝに新舊兩譯を對照して以て何人にも初めて讀み易きものとなつた。されば何人も之に依りて過去に於ける我佛教文化の根柢を知るのみならず我思想界もまた佛教文化復興の黎明期の今や目前に迫りつゝあることを察知せよ。

發行所　丁子屋書店
京都市下京東六條
振替　東京四一五九
大阪一〇二九
珠數屋町
七〇九

世界的佛教文化の一大權威＝佛典の基礎學の核心

大谷大學教授赤沼智善先生著

阿含の佛教

原文漢譯對照菊版約五百頁
和譯洋本堅牢美裝
定價金拾圓
送料金拾八錢

亞細亞の文化は即ち佛教の文化であるとは何人も云ふ所であるが、佛教は如何なるものかといふと其精髄を掴むことが出來無い、經に六千餘、門に八萬四千、宗に十餘ありといふ具合であるから、眞に佛教を知ることは蓋し容易ならぬ事である、近年迄は佛教の考察に就て主として天台大師の五時八教判などが、權威となつて來たのであるが、それよりも深く根本的に突き進んで、佛教の根本義を捕へんとする新傾向が、近年の佛教研究界に於ける主なる傾向の一であることは否定し難い處であると思ふ。

本書は古來小乘佛教の經典として貶せられ、比較的に重要視せられなかつた阿含經及び律典に依つて經典多くの經典の中に、最も忠實なる言行錄であるといふ見地から、直接に阿含經及び律典に依つて經典そのもの、中から釋尊の傳記を稽がへ、佛教の主要なる教義を觀察し、佛弟子の日常の行事を叙し以て佛教の如何なるものなるかを究め、後代佛教の發展の徑路を見定めやうとしたものである。

本書は此目的のために(一)佛陀編(二)法編(三)僧伽編の三編に分ち、各編下に著者の研究の結果を示し、猶その研究の材料としての阿含經及び律典を拔萃して各編に配し、讀者をして自身直ちに大聖釋尊に接し、佛陀の金口から親しく佛教の何ものたるかを聞き得るやうに編述したものである。

本書に於て特に著者の苦心したるは、漢譯阿含經を拔萃して上記の目的に副はしむると共に、之に對應する巴利語阿含經を譯出して、兩譯相對照せしめて經文の意義を明瞭に了解し得るやうにした點である、全經典に亘りて得る智識と感銘とを充分に讀者に與ふることを固く信ずる。

『阿含の佛教』一編は佛教の最も根本的なる研究の一であり、これから諸般の根本的な佛教研究が起り來るべきものであると信ずる、讀者は此研究に依つて經律原典の拔萃翻譯により、生ける大聖釋尊、三千年の昔人間として最も偉大なる足跡を印した、さうして今日幾億の心靈上に今現在說法し給ふ喬答摩佛陀に面接してその親化を受くるの感じをなすであらう、佛教文化復興の黎明に當り本書の如き內容ある研究を發表せられたる著者の眞意も亦た此に存するものである、印刷裝幀共に完備の點に於ても自信を有するのである。

發行所　京都市下珠數屋町　振替（東京四五九七　大阪一〇二九〇）　丁子屋書店